

古典文学における東国意識

佐々木 久 春

「記紀」も地方についての記述はあるが、「風土記」という書名はいかにも地域性が色濃い書名で、地方的発想が見られそうである。たしかに、「記紀」が中央の意識によって書かれた神話であるのに対して、「風土記」の説話は国守の命で集められたものではあるが、土着の豪族の支配性が見られる。すなわち、中央の神話に対する地方の主張が認められる。「国引き」伝承などは、その例である。だが一般的にそれらは、自由な発想による地域の歴史を語るものでなく、行政上地域が組み込まれていく経緯を示している。先住の民は、土蜘蛛であり、熊襲であり、蝦夷であって、それらが和朝廷の支配下に組み込まれていく歴史の始まりを示している。所詮は、官命にこたえて各国の庁で編述し中央へ報告した文書である。

平安時代に入ると、都あるいは天子の直轄地を意味する「畿」、その内と外である畿内、畿外の意識は極めて強い。次に平安朝の作品から、順次その東国意識を見ていこう。

1

『伊勢物語』第10には、東、陸奥入間の郡（埼玉県）の女性がとりあげられる。男が武蔵国のある女に求愛した。

父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心つけたりける。

女の父親と母親の意見が違ったのである。母は常々娘を高貴な人に娶せようとしていたが、父親は普通の人に嫁がせたかった。その理由は、次のとおりである。

父はなほびとにて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人と思ひける。

母親は、男に歌を贈る。

みよしののたのむの雁もひたぶるに君がかたにぞよると鳴くなる

「雁」は男を「頼む」 娘のことで、「田の面」の雁でもある。男の返しはつぎのとおりである。

わがかたによると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか忘れむ

この父親を除外した男と母親の「雅交わし」は、基本的に都人である作者の東を田舎として見る態度をすでに表している。それ以上に母親の言葉を、そのまま田圃の雁のことは忘れないと言った男の態度は痛烈である。

結びは「人の国にても、なほかかることなむやまざりける」よその国へやってきても、やはり男のこのような風流ぶりはやむことなかった、というのであるが、男の態度と母親の懸命さの間に対照的に鄙ぶりが、ふっとこっけいなものとして浮き上がってくる。「人の国」という言い方も当時の都人の態度を表すものであろう。

『伊勢物語』第14は陸奥（宮城）の話である。土地の女が京の男を「めづらかに」思って、「切に思へる心」があつて、歌を贈った。

なかなか恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

なまじ恋い焦がれて死ぬより蚕にでもなったほうがいい、短命であっても、というのである。歌への感想は「歌さへぞひなびたりける」、人柄はもとより歌さえ鄙びているという。男は「さ

すがにあはれと思ひけむ、いきてねにけり」

話は続く。男はまだ夜の深いうちに女の家を出たので女は歌を詠んだ。

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

一首の意は、夜が明けたらな、馬草おけにぶち込まずにおこうか鶏め、まだ早いのに鳴いてあの人を帰らせてしまった、というのである。「きつ」は秋田辺でも「キッツ」「キッチ」と言うが、馬に水を飲ませたり飼葉をやったりする（筆者が見たのは木を横にしてくりぬいたもの・秋田県仙北郡）大きな桶のことであろう。

男の返し歌は、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

歌枕の姉齒の松が人だったら都へと言いたいところだが、あなたもこの地の松、いっしょには行けません、と言う。とどめを刺すように「(女は)よろこぼひて、(あの人は私を)おもひけらし」と人々に言っていた、と話を結ぶ。

同じく第15も、陸奥信夫（福島）の話である。男があんな境遇にいるべき女ではないと思って歌を贈った。

しのお山しのびて通ふみちもがな人の心のおくも見るべく

作者は言う、格別とり柄も無い女、その女のほんとうは情趣を解さない野蛮な心「さるさがなきえびすごころ」が解ったらどうしようもなくあきれ返るだろうよ。雅な男に対して「夷」の女が描かれている。

「更科日記」の世界ではどうか。作者が長じて後、親はまたもや国司として「はるかにとほきあづま」常陸の介として赴任することとなる。近い国であったらお前を「胸あくばかりかしづきたて」るつもりだったが、「我も人も宿世つたなかりければ」はるか遠い国になってしまった。

作者は幼い時にも上総の国に行った。父は回想する「心地もいささかあしければ、これをや、この国に見すててまどわんとすらむと思ふ」となげく。それは、

人の国の恐ろしきにつけても（中略）田舎人になりて迷はむ、いみじかるべし。

ということだからである。地方は恐ろしいものと否定してしまう。

2

『平家物語』の巻第8「法住寺合戦」では、後白河院の御所に押し寄せる源氏方の義仲の軍に対して、守護の指揮官・平知康は言う。

末代ならんからにや、なんぢら夷の身として、十善の帝王に向かひまゐらせて、いかで弓を引くべき。

いかに末世とはいえ、お前ら田舎者の分際で十善の帝王（後白河院）に刃向かうとは何事だ、と言う。これは、対東人ではないが、京の人間の、京以外の者に対する蔑視である。しかし、武者としては貧弱を通り越して、滑稽な知康の姿が描かれている。知康は、もともと武家ではなく、鼓の名手として法皇の近習第一の者であったので、大將軍に任ぜられた事を「いくさの行事をうけたまはる」と言い、公事、儀式の指揮者としての「行事」という言葉が用いられている。

また、同じく『平家物語』巻第8「義経熱田の陣」では、藤原基房に求められて木曾義仲は大赦を行う。その義仲は「ひたすらの荒夷の様なれども」と評されている。当時、都の貴族からは、定家の「紅旗征戎」という記録にあるように東人は「夷」や「戎」、すなわち「えびす」と見られるのが一般だったのであろう。

『徒然草』137段には、月、花の見方が述べられる。後に国学者宣長が反論したように兼好の見方は、中世美学を代表するようである。その彼から見た田舎人は、どぎつく感じられた。「よき人」教養ある人と対照されている。

片田舎の人こそ、色こく万はもて興ずれ。

態度がしつこく、あくどいというのである。

花の本には、ねぢより立ち寄り、あからめもせずまもりて、酒のみ、連歌して、はては、大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなど、万の物、よそながら見る事なし。

「心なく」（思いやり無く・風流心無く）とか「よそながら見る事なし」（一步退いて、はなれて見る・それとなく見ることがない）という態度なのである。

『徒然草』の141段には、東国人の良さも挙げられている。

堯蓮上人は三浦某といった武者であった。故郷の人が京に来て、東国人と都の人を比較する。

吾妻人こそ、言ひつる事は頼まるれ。都の人はことうけのみよくて、実なし。

しかし、東国出身の上人は言う。それはそうだが、

己は都に久しく住みて慣れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心柔かに、情ある故に、人のいふほどの事、けやけく否びがたくて、万え言ひ放たず、心弱くことうけしつ。

都人は、心やさしく情あるのできっぱりと断りかねて、頼まれたことを引き受けてしまう。

偽りせんとは思はねど、乏しく叶はぬ人のみあれば、おのづから、本意通らぬ事多かるべし。

貧乏で不如意が原因で、対して東国人は、

心の色なく、情おくれ、ひとへにすぐよかなるものなれば、始めより否といひて止みぬ。

というように、心に屈折なく単純率直に断る。

にぎはひ豊かなれば、人には頼まるるぞかし。

裕福なので信用される、と言う。これは近代に入ってからであるが、ただちに次の事を思い出させる。秋田出身の画家、平福百穂の話である。

自分の郷里秋田は杉の産地であるが、その杉は材質がよいので、酒樽などに造られて、非常に持ちがよいといわれている。しかし酒樽に必要な木の香の点にかけては、吉野杉に遠く及ばない。そこで吉野杉を移して秋田で育てたら理想的な杉材ができるだろうというので、吉野から杉苗を取り寄せて植えてみた。ところが冬になって雪が積もると、雪折れがして、どうも育たない。暖かで雪の少ない大和の山野に芽生えた吉野杉は、寒くて雪の多い秋田では育てることがむずかしく、秋田杉の材質の強いのは、寒さや雪に耐えて育ったところから来ていると見える。（西尾実『自然・人間・古典との対話』国土新書）

話題の事実の真因が、環境変化によるのか遺伝的素質によるかは別として、言うところは北国人らしい根強さと畿内人の和やかな人間的香気が対照されているのだろう。その点は『徒然草』の記述と同様である。

『宇治拾遺物語』巻1ノ13に次のような記述がある。

比叡山に「田舎の児（ちご）」が来て、すばらしい桜の花に烈しい風が吹くのを見てさめざめと泣いていたという。僧がそっと寄って言った。

などこうは泣かせ給ふぞ。此花の散を惜しうおぼえさせ給か。桜ははかなき物にて、かく程なくうつろひ候なり。されども、さのみぞさぶらふ。

僧は現世のうつろいに執着せず、淡々と無常に接する事を説いた。稚児の答えはこうだった。
桜の散らむは、あながちにいかがせん、くるしからず。わが父（てて）のつくりたるむぎの
花の散りて、みのいらざらん思ふがわびしき。

これらの、僧と稚児の態度について作者は次のように評している。前文に続いて、
（稚児が）さくりあげて、よゝと泣きければ、うたてしやな。

すなわち、「うたてし」なさないことだなあ、がっかりさせられることだよ、というのである。

この僧と稚児との態度の違いは、形而上的思考と形而下的行動観、貴族・僧侶と庶民・農民の
違いであろう。その解釈も一般的には、長所、短所が裏腹なものとしてなされよう。

上記三例は、畿内の優雅、風流に対する畿外の野鄙、粗野を示すが、谷川徹三の言う「和魂・
にぎみたま」と「荒魂・あらみたま」、「アポロ的」と「ディオニゾスの」という対照的な型とし
て捉えることもできる。

3

秋田の錦木塚は、政子姫と若者の悲恋を伝える。姫は狭名の大海の娘だったが、ある若者が姫
を恋した。恋する男は錦木を門口に立てる。木の枝が屋の内に入れられれば思いは成就するの
である。若者は遠い道のりをやって来ては木を立てたが、姫の父は身分違いとして許さなかった。
毎日来ては置いていく、満願の一千本の直前に、若者は病に倒れて亡くなった。伝え聞いた姫も
悲しみに、やがて亡くなった。その二人を吊ったのが、この塚だという。

上の伝説と古代に陸奥から調進されたという「狭布」（けふ）が一緒になって、和歌や謡曲に
なった。歌では能因の『後拾遺集』巻1 1恋1が古いだらう。

にしきぎはたてながらこそくちにけれけふのほそぬのむねあはじとや

毎日、錦木を門口に立てたのに、あの子は取り入れてくれないから、門口で朽ちてしまった。
狭布の細布の巾が狭くて体にあわないように、あの子はどうしても私にあわないつもりだろうか。

その他、錦木の歌は、たとえば、大蔵卿匡房（『詞花集』）、藤原永実（『同上』）、賀茂重保
（『千載集』⁽⁵⁾）、前大納言隆房（『新後撰集』⁽⁶⁾）にある。私家集では西行『山家集』⁽⁷⁾に見られる。

また、狭布の細布の歌は、たとえば、正二位隆教（『新千載集』）、伏見院御製（『新拾遺集』⁽⁹⁾）
に見られる。

和歌以外では、軍記物語『太平記』⁽¹⁰⁾巻21（南北朝時代）、歌謡『松の葉』⁽¹¹⁾（室町時代～江戸時
代初期）、歌舞伎『傾城壬生大念仏』⁽¹²⁾（元禄15・1702）、『幼稚子敵討（おさなごのかたきうち）』
⁽¹³⁾（宝暦3・1753）、蕪村の発句などに見られる。それらのうち『太平記』では、男の胸中を「夷心」
と称している。鎌倉時代の藤原顕昭の歌学書『袖中抄』にも「錦木」について、
陸奥国の奥のゑびすは、男女をよばはむとする時
と記している⁽¹⁴⁾。

あわれ深い恋の物語も、すべて都人の視点からとらえられている。東のさらに道の奥の山間にも
もこのような可憐な恋がある、さらに言えば夷心にも恋のあわれさがみられる、ということであ
る。

4

東国意識は、歴史書の上にも多く見られる。高橋富雄先生の『東北の風土と歴史』⁽¹⁵⁾に詳しい。
鎌倉幕府の執権北条時頼の諸国巡回記と伝えられている『人国記』が引かれている箇所。

陸奥国の風俗について。この国は日本のさいはてである。だから人の気も行き詰りまことに尖敏、万丈の岸壁のようである。道理がわかってもこれを改めて認めるということはめったにしないし、また知ったとしても、まるで川の流れがとまって、塵芥が積もって水が清むということがないようなものである。だから、これという人がこれまで出たことを聞かない。

こんなわけだから、頼もしいところもあるが、また情ないところもある風俗である。

この国は日の本の国であるから、人の色は白く、目の色は青い。人のなりかっこうはいやすく、話しぶりは卑劣であるが勇気のあることは、日本中劣る国はまずあるまいと思われる。男子は上下とも勇気を本とするところであるから、偏鄙・偏屈ではあるが、いさぎよく、意地があって、恥を知るので、この点はよいと思われる。

女の風俗であるが、色は白く、髪も長く、顔も美しいが、そのなりかっこう、ことばはきわめて悪い。しかし、心底はやさしく、情があり、気節も正しいから、上方の男などより、ずっと頼もしい。

出羽の国の風俗は、奥州と大体は変わるところがない。しかし、奥州よりは律儀でかつ知識も上である。

地味は北に行くほど痩せていた。「日本後紀」の延暦 23・804 年の記事を紹介している。当時の秋田城（現在の南秋田郡五城目町）辺は不毛の地で、川辺府（現秋田市高清水）まで撤退せざるをえなかったという。近世、近代に至る北奥羽の太平洋側も同様に、戊辰の役に敗れた会津・南藩の移住地（現青森県上北、下北・三戸諸郡、岩手県二戸郡）も、「郡中至る処地味瘠薄、その質灰の如く、米穀実り難く産する所、多く雑穀に過ぎず」という状態だった。

いわゆる「夷の風俗」観は、近世に入っても続いた。『東遊雑記』には、秋田領を北に進めば、

- 民家も至って悪しく、言語の通じ悪しく、北狄の地と別ならぬように覚しきことなり。
- いにしえこの国も蝦夷地にてありしゆえ、この言葉ありと思わるるなり。十人に二人か三人ならでは言語の通ぜるものなし。
- 衣服、居宅の見苦しきは夷風のこりて少しも恥じざるなり。

と、記している⁽¹⁶⁾。

橘南谿も、次のように言っているという⁽¹⁷⁾。

南部・津軽・秋田辺は、むかしは皆夷人の住家なりけりと覚ゆ。やうやうこの式百年ばかりこそは、かく全く日本の地と成れりといふ人あり。

以上、高橋先生の論ずるところによって、歴史上の東北意識について引かせていただいた。

明治以降も、東北の人々は都をめざした。近代の人々は、自国東北および東北人の特徴を次のようにとらえている。これまで幾度か論述する機会があった。出身の作家や文化人の言葉から、およそ次のようにその特徴をまとめることができよう。

- 1) 耐えることに強い
- 2) 香気にかける、土着性
- 3) 貧しさと自己の世界
- 4) 苛酷
- 5) 野蛮人の敏感さ
- 6) 劣等感と居直り
- 7) しつこい頑固さ

8) 暗さと夏祭りの陽気さ

それら、具体的な論述については、これまで発表した拙稿を参照されたい。⁽¹⁸⁾

また、当今の青年たちは都会へのコンプレックス（裏返した意味で田園的なよさ）、利便性のなさ、寂しさ（繁華、殷賑ならざること）を東北もしくは田舎の特徴として挙げる。

5

以上見てきた東国の夷ぶりの意味については、縄文文化を基底において、前述した谷川徹三をはじめ多くの方々が論じてきた。高橋先生の『東北の風土と歴史』でも、新渡戸稲造、半谷清寿らの東北論が紹介されている。近年はまた東北学の提唱も盛んである。

ところで、生物学に「進化論」なるものがある。進化は退化の対語であるから、そもそもは「進歩」の意味があったのだろうが、実はその意味はないと言う。東北の文化が、縄文文化から弥生文化に推移したのも、そこに進歩という概念をもってくることはできないだろう。しかし、東北の実情と縄文文化を結びつけて、日本の政権担当地域を覆う弥生の伝統と比較することが行われてきた。

逆に、東北の縄文文化を強く意義付けて、その意味を称揚する。もちろんそれは意味あることだが、いたずらにそれが独立的な今後の価値を担うと見るのはどうだろうか。東北は、人口減少・流出という現実の前にあまりにさびしい。歴史と伝統と風土と人間が有機的に一体化し、これぞ「東北」と力をもって断ずるには、もう少し時間を要するかもしれない。

註

- (1) 平福百穂の事
- (2) 「縄文的原型と弥生的原型」
- (3) おもひかねけふたてそむるにしきぎのちつかもあはであふよしもがな
- (4) いたづらにちつかくちににしきぎをなほこりずまにおもひたつかな
- (5) にしきぎの千つかにかぎりなかりせば猶こりずまにたてましものを
- (6) ひとしれぬ心にたつる錦木のくちぬる色やそでに見ゆらん
- (7) 立て初めてかへる心は錦木の千束まつべきこちこそせぬ
- (8) いへばえにこがるゝむねのあはでのみ思ひくらせるけふのほそ布
- (9) 世とともに胸あひがたきわが恋のたぐひもつらきけふの細布
- (10) サテモ錦木ノ千束ヲ思シ夷心ノ奥ヲモ憐ト思シル事モヤト
- (11) 夫は錦木とり持ちて、閉いたる門をたゞけども内に答ふる蟲の音の、思ひきろやれ恋の道、きりはたりちやうちやう。
- (12) 誰を待つやら黄昏時に、門に門に立との、錦木かいの、夜立ちやる。
- (13) にしきぎの門をめぐりておどりかな
- (14) ① 前後を引いておこう。

錦木は千束になりぬ今こそは人に知られぬ閨の内見め 顕昭云、錦木と云ふは、世のふる事にて、昔よりいひ伝へたるにつきて、二つのやうあり。一には陸奥国の奥のゑびすは、男女をよばはむとする時、文をやる事はなくて、一尺許りなる木を、まだらに色どりて、その女の家の門に立つるに、逢はんと思ふ男なれば、その錦木を程なく取り入れつ、遅く取り入るれば、しるて猶立て、千束をかぎりに立つれば、まことに心ざしありけりとて、その時に取り入れて、逢ふといへり。或は千束になりても、取り入れぬは思ひたえぬといへり。今の歌は千束立てて逢ふよしの心をよめる也。

②「けふのほそぬの」についても引用しておこう。

みちのくのけふの細布程せばみ胸あひがたき恋もするかな 顕昭云ふ、けふの細布と云ふは、陸奥にいでくるせばき布なり。せばければ狭布と書いて、やがて声に「けふ」とよみて、訓に「ほそぬの」とよむ也。その声訓

をあはせて、「けふのほそぬの」と云ふ也。されば胸あはぬよしをよむなり。やがて「けふのせばぬの」ともよめり。無名抄云、このけふの細布といふは、陸奥に烏の毛にて織れる布也。多からぬ物にて織る布なれば、はたばりもせばく、ひろも短ければ、上に着る事はなくて、小袖などのやうに、したに着る也。さればせなかばかりを隠して、胸まではかゝらぬよしをよむなり。

- (15) 高橋富雄『東北の風土と歴史』（「風土と歴史2」昭和58.11、山川出版社）
- (16) 古川古松軒『東遊雜記』、天明8年の大飢饉に幕府が東北・北海道に巡見使を派遣した、その随員の一人。
- (17) 橘南谿『東西遊記』
- (18) 『日本文芸論叢』「文芸と風土」（昭和51年11月、笠間書院）
『新秋田風土記』「秋田の文学と種蒔く人の運動」「秋田の風土と人物」（昭和59年8月、創土社）
『東北の作家たち』「伊藤永之介」（昭和59年8月、福武書店）
『作品論宮沢賢治』「税務署長の冒険」（昭和59年7月、双文社出版）
編著『秋田の文芸と風土』（平成11年、無明社）
「伊藤永之介の文学と風土」（平成15年9月、『国文学解釈と鑑賞』別冊）